

加藤修弘卒業論文の公刊にあたって

森安, 孝夫
大阪大学

<https://doi.org/10.15017/27494>

出版情報：九州大学東洋史論集. 40, pp.1-6, 2012-03-31. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

加藤修弘卒業論文の公刊にあたって

森安 孝夫

本論文は、昭和四一（一九六六）年度の卒業論文として、今からおよそ四五年前に加藤修弘（かとう のぶひろ）より東京大学文学部に提出されたものである。四百字詰め原稿用紙約一七〇枚におよぶ大作というだけでなく、とても卒業論文とは思えないその水準の高さには驚くべきものがあり、東洋史学科の教授陣からは将来を嘱望されたと伺っている。因みに審査に当たられた教授陣（非常勤を含む）は、年令順に周藤吉之・田川孝三・山本達郎・榎一雄・西嶋定生・護雅夫・山崎利男の七氏であった。

しかし東京大学大学院人文科学研究科修士課程（東洋史学専攻）に在学中に「東大闘争」、すなわち世に言う「東大紛争」が起こり、「全共闘」の中に身を置いた加藤氏は、本人（私信）の言葉を借りれば「大学闘争の中で、学問研究に携わる者の主体の貧弱さを嫌というほど見せつけられたことで「見切り」をつける」と同時に、「あの全共闘運動の中で一瞬でも感じた新しい学問への予感を手離したくなかったという積極的な」理由もあって、大学を離れることになった。以後は、高校の歴史教員として、定時制高校を皮切りに多様な学校現場を歴任するかたわら、戦後補償運動、特に中国の性暴力被害女性たちの支援・調査活動に関わってこられた。

私自身は、「東大闘争」時は駒場の教養学部在籍しており、本郷の文学部に進学後、同じ東洋史学科に所属したとはいえ、榎一雄・護雅夫両教授の北へ中央アジア史の講義や演習と一緒に参加することはなかった。しかしながら、当時、北・中央・西アジアに興味を持つ学生・院生・若手教員が大学の分け隔てなく集って活動していた「アジア文化研

研究会」という場で加藤先輩と知り合うことができた。私が参加する以前の発足当初から「国家権力と宗教」という共通テーマを掲げていたアジア文化研究会の機関誌『アジア文化研究』は、文字通り三号雑誌で終わったが、加藤氏の契丹史に関する論考として「契丹君長権の史的考察」（創刊号、一九六八、三一―五二頁）と「契丹社会における支配権力の発生について」（第二号、一九六九、五―一九頁）が発表されている。これら二編は、いずれも卒論に関わる内容ではあるが、卒論そのものではなく、卒論で論じられなかったところを補ったものであり、卒論の本体を見なければ理解が難しい。しかし肝腎の卒論については、その前半の極めて短い要約「遊牧君長権力論——遼代著帳官制の史的意義について——」（創刊号、一四―一五頁）が出ただけであった。私自身、『アジア文化研究』の二編しか読めない段階では全体像がつかめず苦勞した経験があり、私にとっても「幻の卒論」であった。

ところがその後不思議な御縁があつて、大学を離れた加藤先輩とその伴侶、並びに私より先にアジア文化研究会に参加していた家内との四人が個人的に親しくお付き合いするようになり、いつの時点だったか記憶は定かでないが、あの「幻の卒論」を私がお預かりすることになったのである。その時、加藤氏からは、それをどのように扱ってくれてもよいとの御言葉も頂いた。以後、私自身が大学教員となつてからは、折に触れて学生にそれを読ませるだけでなく、学界のためになんとかそれを印刷・公刊したいと願ひ、そのような場を模索してきた。

二一世紀に入り遼・西夏史の研究入門を執筆するよう依頼されたのを受けて、契丹史の研究者である武田和哉氏に意見を求めた際、加藤卒論を活用する方法を相談すべく本体をお見せしたところ、やや諦めかけていた私の宿願を是非とも果たすようにという激励とともに、本論文出版となった暁には応援したい旨のお申し出さえたいただいた。にもかかわらず、それが実現することもなく、とうとう私自身が大阪大学で定年を迎えることになつてしまった。そのような折、たまたま大阪大学で開催された遼金西夏史研究会の第11回大会で挨拶することになり「幻の卒論」に言及したところ、川本芳昭・九州大学教授より出版を前向きに検討してもよいというありがたい御提案をいただいたのである。

そこでまずは加藤氏自身の諒解を得た後、私は武田氏と相談し、川本教授と連絡を取りながら、具体的作業日程を組

み、九州大学において手書き原稿をパソコン入力すること、武田氏は関西にある契丹史の研究グループ「遼史を読む会」の有志に協力を仰いで共同執筆の「補注」を作成すること、またその後の同会内での意見交換により武田氏が「解題」を執筆することが短時日のうちに決定された。そしてここに、その公刊が実現することとなったのである。

本論考ならびに『アジア文化研究』に掲載された加藤氏の三論文には、恩師である護雅夫教授の影響が色濃く見られる。護教授の学問的業績は多岐に亘るが、これら三論文に深く関わるのは、内陸アジアに展開した遊牧国家の国家構造を理解するために *Nokor*、ネケル（ノコル）という概念に着目した点、並びに遊牧君長権の淵源としてのシャーマンに注目した点である。特に本論考・前半にあたる第一篇で論じられた「著帳官」こそは、そのネケルという概念ないし制度に対応するものとして論じられている。私が本論考を高く評価し、出版にこだわってきた理由は正にここにあるといつても過言ではない。もちろん本論考・後半の第二篇も契丹史研究にとって重要なものであるが、その意義については武田氏執筆の「解題」に譲ることにする。私が強調したいのは、契丹の「著帳官」をモンゴル帝国草創期の *Nokor*、ネケル（ノコル）に比定した第一篇の学問的意義である。

『アジア文化研究』に掲載された加藤氏の二論文によれば、耶律阿保機の権力は家父長的君主権力であった。耶律阿保機は自己の家産的臣下集団を背景にして先ずは自己の属する部・氏族を抑え、次いで他の契丹諸部・氏族を統合していくが、その時の原動力となったのが家産的臣下集団を充実させた「腹心部」なのである。「腹心部」はその後に整備されて「著帳官制」となるが、それは各部・氏族の有力家系の子弟を国家に取り込み、契丹皇帝を中心とする家父長的君臣関係を作り上げるための制度として機能したという。

そして、本論考の第一篇で加藤氏は、一〇世紀に耶律阿保機によって創建された契丹帝国（遼朝）の国家構造ないし支配機構の核心が「著帳官制」にあり、その起源が建国者たる阿保機自身が編成した「腹心部」にまで遡ることを看破し、その「腹心部」や「著帳官制」の本質を、私と共通の恩師である護雅夫先生が若き日に研究・発表したチングス汗のネケルと対比させたのである。

もちろん、いかに出色の出来映えであったとはいえ、ここに公刊するものは学部生の手になる卒論なのであり、そこに論証不足と思われる箇所が散見されるのは致し方ないところである。実は第一篇を締め括る第七章「モンゴル帝国における *Nökič* との比較」の末尾に、「以上、初期モンゴル帝国における *Nökič* のあり方を、遼の著帳の姿と比較してみ、その類似性の大きさは驚くばかりである。私はこの両者が、ともに北方遊牧民族の固有の伝統に基づくものであり、本質的に全く同じものであるといつてよいと思う。」と書かれている箇所の欄外には、東大教授陣のどなたかの手で「勇み足」との書き込みがある。しかるに私の評価はそれとはまったく異なり、本論考の最大の価値はここにこそあるのであり、今後の中央ユーラシア史研究にとって必須の先行研究になることは疑いないと信じているのである。一方、加藤氏が卒論を執筆し始める二年前に、実は著帳官・御帳官を論じた島田正郎論文が公刊（武田氏による解題参照）されており、本人はそれにまったく気付いていない。卒論指導は学生任せであった当時の東大東洋史の状況で、学部学生に先行研究を完璧にトレースするように求めるのはやや酷であるが、公刊する以上はやはりそれは欠陥となる。しかし、その公刊は本人ではなく、島田論文と比較した後も加藤卒論の価値はいささかも損なわれていないと判断した森安の責任で行なうものであり、情状酌量をお願いする次第である。この判断が誤っていないことは、武田解題によっても諒解されよう。

ところで、遊牧国家が興亡した中央ユーラシアの歴史を解明するための努力は一九世紀末以来営々と続けられてきたとはいえ、そもそもが農耕都市文明世界における国家の変遷を辿りつつ、国家を成立させている要素とか国家構造を探り出して「国家」というものを定義したために、それらの条件を満たさない遊牧国家は世界史の中で過小評価されがちであった。西欧発の近代国家論やマルクス主義唯物史観の強い時代にあつて、それとは異なる見地から中央ユーラシア史を再構築するのは至難の業であつた。しかし今や世界情勢も学界状況も一変した。今後は遊牧国家の本質を理解するために、「著帳官」も含む *Nökič* ネットル（ノコル）という歴史学的概念、さらにはそれと表裏一体である *Kasič* ケシクという概念ないし制度の探究が、ますます広い視野のもとに進められるべきなのである。最近では、それを予感させ

る史実の発掘も目につくようになってきている。今後、契丹の「著帳官」やモンゴルのネケルないしケシク「怯薛」と対比させられるものとして、例えば北魏の「中散」・「直後／直後真」・「直真／直寢」・「烏矮真」とか「比徳真」・「可薄真」・「胡洛真」・「乞萬真」など、北齊・隋の「直後」・「直寢」、隋・唐の「庫真（庫直とも誤記されるから元は庫直真？）」「驅啞真（驅啞直とも誤記される）／屈啞真」、突厥・ウイグルの「窟合真／枯合振／胡臈振」庫合真Ⅱクルカプチン」「附離」や「シャダピット・タルカン・ブイルク」、安史の乱勢力をはじめとするソグド系諸集団の「チャカル（柘羯／赭羯）」や「曳落河」、イスラム諸国家の「シャカル」「グラーム」「マムルーク」、オスマン帝国の「カプクル」、大清帝国の「グチュ」「ヒヤ」などに、これまで以上の光が当てられるべきである。

ネケルとケシクの違いは重要なので、ここに、同じく護雅夫門下の先輩である志茂碩敏氏の見解を踏まえた私の考えを述べておく。ネケルとは、モンゴル語の原義は「友人、同僚」であるが、チンギス汗に仕えた者、すなわちモンゴル草創期のネケルとは主人に対して隷属する「腹心の部下、御家人」である。それゆえ、そこから抽出され一般化された歴史学的概念としてのネケルとは、後に国家君主となる主人が権力を奪取する以前から起居を共にし、日常生活においては衣食住を取り仕切る家産的臣下集団であり、軍事行動を起こす際には主人を守護する近衛集団となり、建国後は君主の命を受けて軍事・国政を補佐する存在となる。つまりネケルとは権力奪取までに腹心となった部下とその子孫に限られ、従つてもはや増えることはない譜代の家柄の家臣とも言うべきものである。一方、順番に宿衛する者であるケシクは、権力奪取前においてはほぼネケルと重なるが、権力奪取後にも新たに服属してきた集団の君長の子弟を、半ば人質として宮廷に取り込み、訓練・教育を施してから軍人や高級官僚として登用するものであるから、理論上はいくらでも増大していく。つまり、ネケルはケシクに含まれるが、ケシクの長になるのはネケルの家柄の出身者で占められる。ただし、注意すべきは、ポストⅡモンゴル期のペルシア語史料に現れる「ナウカル／ノウキヤル *nawkar*」(*nökör*、ネケルの音訛)には、ケシクないしはチャカルとの混同が見られ、「腹心の部下、御家人」よりもむしろ「主人に命を預けた」食客」もしくは単なる「従者、召使い、下僕」の意味で使われる場合の方が多くなっているようである。

執筆後半世紀近い時を経て世に現れた本論文は、時代と地域を超越して展開した中央ユーラシアの遊牧国家のみならず、かつては「征服王朝」と言われた「中央ユーラシア型国家」、さらにはそれに先行する北魏・北朝・隋唐といった「拓跋国家」の国家構造を考察する上で、今後の研究にとつて欠くことのできないものになる。漢文で「親信」「侍衛」「宿衛」「近侍」「内侍」などと書かれるような側近集団あるいは親衛隊的なものはもちろん、漢文やイスラム史料、さらにギリシア・ラテン語史料などでは一見奴隸的で低く卑しい身分とされながら実は君主のすぐお側近くに仕えている者も、全て歴史概念としてのネケル（ノコル）・ケシクではないかと疑つてかかる必要があるということである。そういう意味で、もう三〇年以上前から北魏の「内朝」について同様の見通しをもって研究を継続してこられた川本芳昭教授の元で、本論文が公開されることになったことに、とても偶然とは思えない何かを感じている。以下には、その実現に御尽力いただいた方々の御名前を列挙し、加藤修弘・森安孝夫の連名で衷心より感謝の意を表する次第である。

川本芳昭（九州大学大学院文学研究科 教授）、武田和哉（奈良市教育委員会奈良市埋蔵文化財調査センター 主任）、毛利英介（京都大学文学部 非常勤講師）、森部 豊（関西大学文学部 教授）、藤原崇人（関西大学文学部・龍谷大学文学部 兼任講師）、山根弓果（龍谷大学大学院 博士課程）、武内康則（日本学術振興会 特別研究員・大谷大学 P D）、戸川貴行・藤野月子・福永善隆（以上三名、九州大学 専門研究員）、稲住哲朗・植松慎悟（以上二名、九州大学大学院 博士課程）、井上雄介・塩田孝浩・福井順忍・吉岡宏治（以上四名、九州大学大学院 修士課程）

凡例 ①本文中、アラビア数字の番号は、原註の番号を示しており、漢数字の番号は補注の番号を示している。

②本文に関する諸事項については、補注の【全体事項】も併せて参照されたい。